

修羅能の変遷と「生田敦盛」

天野文雄

同じ修羅能と言っても、金春禪鳳（文明）（永正頃に活躍）作の「生田敦盛」は世阿弥が創始した修羅能とはその趣をおおいに異している。作意の面では、世阿弥の修羅能がいずれもシテの妄執と得脱という主題に貫かれているのに対して、「生田敦盛」では父子の再会という人情物的側面が強調されているし、構想面でもシテが作り物から登場するという他の修羅能にはない趣向や、シテの登場に際してその場面が夢中であることを明示する詞章がなく、しかも子方が父敦盛の亡霊に走り寄る場面などがあるために、夢幻能でありながら現在能風な印象を与える点などが「生田敦盛」の特異性として指摘できる。これらの特異性はおおむねは典拠となった御伽草子の「小敦盛」の趣向を忠実に継承した結果なのであるが、ともあれここには修羅能という曲柄が最後に行きついた姿があると言ってよいであろう。そして、その「生田敦盛」の作者たる禪鳳には当然世阿弥とは異なった修羅能

観があったはずであるが、そのあたりの事情の一端は禪鳳の遺した伝書の記述にうかがうことができる。

禪鳳の伝書では、修羅能の後シテは馬上にあるつもりで演ずるべきだが、「箴」だけは徒歩の心得で演ぜよといった、おそらく世阿弥の頃には説かれていなかった演技上の心得が記されている（『毛端私珍抄』）。そうした点も修羅能理解の変遷の一面としてたいへん興味深い。より注目されるのはそこでは修羅能が一貫して「修羅」と呼ばれていることである。修羅能を修羅と呼ぶことに格別の問題もないと思われるかも知れないが、修羅能がたどってきた歴史を考えると、禪鳳伝書におけるこの呼称が有する意義はかなり重大だと言わざるを得ない。

周知のごとく『風姿花伝』第二物学条々に「修羅」の項があり、その記述によると世阿弥以前に存在した修羅の能は鬼能に近い恐しき風体の能であり、それを世阿弥が風雅の心

ある平家の武者や名所旧跡の風趣などを取りあわせて面目を一新させたという経緯が読みとれるのであるが、そうした新風の能を世阿弥は軍体の能と呼んで修羅の能とは呼んでいないのである。世阿弥においてはこの使い分けはきわめて厳密で、新風の軍体能創始後は決してそれを修羅能とは呼ばず、修羅という言葉を使うときには「修羅がかり」（修羅風・修羅風の能の意）などと表現して、軍体能が修羅の能とは別物であることを強調している。「花伝」の記事や修羅という名称から推測されるところでは、修羅の能は軍体の能とは相当にへたりのあるものであったようだから、世阿弥におけるこの厳格な区別は当然で、そこには新風の創始者としての自負が脈打っているのを感じる。ところが、禪鳳は世阿弥なら絶対に軍体と言うべきところを世阿弥の忌避した「修羅」を用いているのである。たとえば『毛端私珍抄』では次のごとくに言う。

此みちに、二曲と申は、哥・舞の二道にいふ也。三鉢といふは、せう・修羅・女なり。是肝要也。

言うまでもなくこれは世阿弥の二曲三体論をふまえたもので、右の尉・修羅・女は世阿弥が老体・軍体・女体と呼んでいるところのものである。この二曲三体論は世阿弥から禪

竹が継承し、宗筠を経て禪鳳に至ったものであるが、禪竹は三体の名称を世阿弥同様に老女軍としており、また『金春古伝書集成』に『禪竹と禪鳳の中間に位置する金春座系伝書』として収められる『金春次郎伝書』『竹田次郎伝書』も同様であって、それが金春座における伝統的な三体の呼称であったことは確實で、三体のうちの老体を尉、軍体を修羅と言いかえたのは禪鳳であったとしてよいであろう。禪鳳の用語の影響であろうか、その後は修羅・修羅能という呼び方が一般化した現代に至るわけであるが、禪鳳におけるこの改変は世阿弥があれほど厳しく峻別しようとした修羅の能に逆戻りしたもので、それは恐しき風体であった修羅というものへの無理解、さらには軍体能という新風樹立の課程への無理解を示すものにはかなるまい。もっとも世阿弥をはるかに隔たる能の守成期に生きた禪鳳であつてみれば、そうした彼の認識をあげつらうのは酷ではあるのだが、こうした点に「生田敦盛」のような修羅能らしくない修羅能が生れる要因の一つがあつたとは言えるであろう。そして「生田敦盛」には禪鳳のそうした修羅への認識の反映と思われる個所がある。最後にそれについて述べておこう。

子方の前に現われた敦盛の亡霊はクドキで閻魔王にしばしの暇をもらつてこの娑婆にも

どつてきた旨を語る。それは中ノ舞のあとでも「あれに見えたるはいかなる者ぞ、なに閻魔宮よりのおん使とや、片時の暇と仰せられしに、今までの遅参に、閻王怒らせ給ふぞ」と繰り返かえされて、修羅の鬨諍をみせる中ノリ地に引きつがれているのだが、修羅道におちたシテが閻魔王から暇をもらつて現世にたち帰るといふのは他の修羅能にはみえない設定である。たしかに閻魔は冥界の象徴ではあるが、厳密には閻魔は地獄の主宰者なのであつて、この点で閻魔王と修羅とのかわりを説かない他の修羅能の方が修羅の理解の仕方として正當なのである。この閻魔王から暇を賜つたとの設定は渋川板の「小敦盛」にもクドキと直接関係を認めてさしつかえないほど近似した叙述があるが、一方渋川板より古態の絵巻系統の「小敦盛」では閻魔王にまったく言及していない。「生田敦盛」が絵巻系の物語に拠つたとすれば、閻魔王のことは典拠を継承したものにすぎないことになる。しかし、そのいずれであるにせよ、閻魔王を修羅道の主宰者とする「生田敦盛」の設定は修羅本来の意義からかなり外れていることは確かであつて、ここに作者禪

鳳の修羅観が刻印されていると言えるのであるまいか。それは『最後の修羅能』としての刻印でもあつたのである。

(上田女子短期大学講師)